

1. 日本が直面するジェンダー平等の課題

現在、世界が共通して取り組むSDGs。第五番目の目標は、「ジェンダー平等を実現しよう」です。日本の現状の立ち遅れは日々指摘されているところですが、世界経済フォーラムが毎年示すジェンダーギャップ指数の二〇二二年の数字は、百四十六の国と地域において、百十六位であり、G7でも最下位でした。改革は待ったなしです。教育においては識字率の男女比や初等から高等教育までの男女の進学率を指標としており、二〇二二年は第一位（同数二十一）でした。つまり、教育の機会においてはほぼ平等が保障されているにもかかわらず、その後の社会的な活躍の機会が奪われているために、女性たちは学んで身につけた能力を十分に発揮することができないという状況です。さらに「隠れたカリキュラム」の問題ととらえられてきた教科書や教材、教師の指導の在り方等についてのジェンダーの問題、「アンコンシャスバイアス」（無意識の偏見や思い込み）の問題等に目を向けて課題の是正に取り組む必要があります。ジェンダー平等な社会の構築のために、教育が果たす役割は大きいと言えます。

このような状況の下で学校教育に求められていることはどのようなことでしょうか。筆者は、児童生徒への教育の改善は言うまでもないことですが、それ以上に、学校の先生方、周囲の大人たちの意識改革のための学習の充実が一層求められているのではないかと考えています。そしてその推進に際して副校長・教頭先生が重要な役割を担っているのではないのでしょうか。

本論では、ジェンダーの視点から教育の在り方を考えていきますが、「ジェンダー」（社会的・文化的性別）、「セックス」（生物学的性別）、「セクシュアリティ」（性的指向性）の3つの概念は切り離せず、とてもかかわりあっていることを確認しておきたいと思えます。

また、近年では、「性的指向と性自認」をすべての人の課題としてSOGI (Sexual Orientation and Gender Identity) という概念も提起されています。こうした議論の進展を若者たちはいち早くキャッチしています。

副校長・教頭として どのように捉えたらよいのか

早稲田大学文学学術院教授 早稲田大学ジェンダー研究所所長 村田 晶子



2. 日々直面する課題

「女子なのに数学が得意なんて珍しいね」、「（重い荷物があるから）男子運んでください」などという言葉を教室で、グラウンドで先生方が発していないでしょうか。それは、理数科好きの女子の力を奪い、男子に力持ちの男らしさを強制するメッセージを無意識に送ってしまうことになっていきます。

大学でジェンダー教育の講義を担当していて、ほとんど毎年セクシュアル・マイノリティの学生に出会ってきました。そして、そのほとんどが小学校や中学校の時から悩み、「これまでに親にも学校の先生にも、誰にも言えなかった」、「テレビとかで笑いの種にされたりしているから自分に問題があるのかと思っていた」と言い、学校や家庭の中で長く苦しんできた胸の内を明かしてくれます。セクシュアル・マイノリティが苦しみを抱え、自殺率が高いことは知られているところです。「話してくれたことを受けとめて一緒に考えていきたいと思う。ジェンダーやセクシュアリティについての学問研究はみんなの幸福を考えるためにあるのだから。」という趣旨のことを慎重に伝えるとホッとした表情を見せてくれます。

私同様、小中学校の先生方も、日々、ジェンダーやセクシュアリティの課題に直面されているのではないのでしょうか。出席簿の名簿は混合にするのがいいのか。痴漢や性被害にあった児童生徒のケアはどうするか。性別違和を感じている児童生徒のトイレや更衣室、修学旅行の宿泊はどうするか。ジェンダーレス制服の導入はどうするべきか？

どのことをとつても一人ひとりの尊厳に関わります。それぞれ「在りたい自分」を探し求めて成長する時期をサポートするために、男女二元論で制度化された学校をどう見直していったらよいのでしょうか。

3. 感性を磨くⅡ「声を聴き取る」ために

先ほど授業の初回であげられる学生の「声」のことを書きました。社会の抑圧の中であげられなかった「声を聴き取る」ために必要なことは何でしょうか。それには先生方の感性を磨いていくことが欠かせないと思います。むしろ、こうした「声」をあげられるようになる社会の制度

の改善も必須であります。

一九九〇年代のころ、男女混合名簿の議論が始まったころのことです。他校に学び混合名簿化に取り組み、敬称を「君/さん」から「さん」に変えた小学校の先生から次のようなお話を聞きました。それは、先生自身も最初は慣れなかつたけれどそのうちに男子の〇〇君、女子の〇〇さんではなく、一人ひとりの人格や個性が浮かび上がって見えるようになってきて驚いたというお話でした。日常の教育の現場で、児童生徒に向けて教師が発する言葉の中に価値観が浮かび上がります。多様性を認め、ひとり一人の個性を尊重するという、言葉にするとあたりまえのことがそれほど定着していない現実も浮かび上がります。名簿の並び順を変えるという小さいことなのですが、システムや言葉の見直しは児童生徒も教職員も内側からの意識改革に取り組みることにつながる重要なことなのだと認識しました。「声を聴き取る」感性を磨き一層の意識改革のために、学習し実践し、リフレクションする重要性を確認したいと思います。

4. 学校や学級をジェンダーにセンシティブな学び合うコミュニティへ

先生方の「聴く力」の向上のためにはひとり一人の学習が必須であることは言うまでもありませんが、それは所属するコミュニティの在り方ととても深く連動しているのだと思います。すなわち、学校や学級をジェンダー、セクシュアリティにセンシティブな学び合うコミュニティへと育てていくことが大切なのだとことです。従来の性別役割分業観に規定された学校教育の在り方をそのままにして、学級の様子や先生方だけが変わるということは難しいと思います。それを見直し豊かな関係を育てていくためには、学校全体の基本方針の明示と教職員による学び合い、教員の男女比や多様性、校務分掌の点検等を通じたジェンダー問題に敏感な教職員集団の形成が欠かせないのではないのでしょうか。

もちろん、ひとり一人が異なる人格を持ち、学校が位置する地域ごとに事情が異なります。児童生徒も保護者も教職員も、さらには地域社会のそれぞれの歴史も異なり、誰もがその歴史や社会の在り方に規定されて、アンコンシャスバイアスを内側に持っています。ですが、学級経

「小・中学校でのジェンダー教育の在り方」 〈連載テーマ③〉 教育課題

営、授業実践等、悩んでいる事例、上手くいった事例を持ち寄り、性別役割分業の克服や、ジェンダー平等の視点で振り返り、次への課題を見つけ、新しい試みを共に考え合う教職員の学び合うコミュニティを創り出していくことが、学級での指導の力量を高めることにつながっていくのだと思います。

5. おわりに

ジェンダーやセクシュアリティに関する議論はこの数十年の間にとっても深まっています。国際的な動向や知見の進展に若者たちの方がどんどんアクセスしているのが現状だと思います。インターネットやSNSの発展がそれを支えており、知見の更新を求められているのは大人たちと言えるでしょう。「女子に対するあらゆる形態の差別の撤廃に関する条約」(一九八五年日本批准)、「第四回世界女性会議・行動綱領」(一九九五年)などに示された教育に関する国際的指針の確認は必須だと思います。近年の「包括的性教育」の議論はいかがでしょうか。ユネスコの「国際セクシュアリティ教育ガイダンス」で紹介され、その八つのキーコンセプトは、①人間関係、②価値観、人権、文化、セクシュアリティ、③ジェンダーの理解、④暴力と安全確保、⑤健康とウェルビーイングのためのスキル、⑥人間の身体と発達、⑦セクシュアリティと性的行動、⑧性と生殖に関する健康等、だれもがその存在を大切にされ、安心して自分を成長させていける教育の考え方を示しています。また、筆者は研究者仲間と『ジェンダーのとびらを開こう 自分らしく生きるために』を刊行したところです。こちらは、十代向けに作りましたが同時に先生方にも読み合っていたいただきたい本です。

ジェンダー平等とセクシュアリティは、一人ひとりの尊厳、生命そのものに深くかかわります。このことを再認識し、互いに学び合いながら学校の改革に臨んでいただきたいと思っています。

i ユネスコ編「国際セクシュアリティ教育ガイダンス 教育・福祉・医療・保健現場で活かすために」明石書店、二〇二〇年

ii 村田晶子・森脇健介・矢内琴江・弓削尚子共著、大和書房、二〇二二年